◆平城宮北西隅の調査―第282-7次

はじめに　本調査は個人住宅の建設にともなって、奈良市佐紀町で実施した。調査地は平城宮の北西隅にあたり、平城宮北面大垣推定線にも近い。調査面積は32㎡（東西8ｍ×南北4ｍ）、調査期間は9月12日～9月22日。

調査地は、住宅建設に際して表土等を除去した後、新たに土を入れている。基本的な層序は、置土の下、現地表下30～40cmで、調査区北半は礫を含む黄褐砂（地山）となり、南半は瓦を大量に含む黄褐粘質土の整地層となる。遺構検出面の標高は約72.8～72.7ｍである。

検出遺構　奈良時代の遺構としては、東西溝1条と掘立柱建物の一部を検出した。

SD17740は幅約1.2ｍ、深さ約15cmの東西溝。溝底の標高は、調査区西端が約72.5ｍ、東端が約72.4ｍで、東へ傾斜している。整地の際に、溝も同時に埋めている。SB17745は整地後の遺構で、8尺(約2.4ｍ)間隔で並ぶ2個の柱穴。調査区の東と北には続かない。掘立柱建物の一部になるのであろう。（小林謙一）

出土遺物　大量の瓦類が出土したが、ほとんどが整地土に含まれていたものである。軒丸瓦では6307Bが5点、6307Hが3点、軒平瓦では6727Aが1点、6727Bが10点あり、いずれも従来の出土数が少ない型式で注目される。したがって、6307B･Hのいずれかと6727Bが調査地近辺での組合せを示す可能性もあるが、『平城報告XIII』では6307Bを平城宮軒瓦編年Ⅲ期前半、6307HをⅢ期後半、6727をⅡ期後半と、別時期にあてる点で問題がある。今後の当調査地周辺での出土傾向に注意する必要があろう。

（岩永省三）

まとめ　調査地は南に緩やかに傾斜する地形に位置しており、溝を境にして北側は地山が高く残っている。また、瓦類の出土も多いことから、そこに築地等があり、SD17740は、築地の南雨落溝であった可能性も考えられる。SD17740の溝心の座標はX＝-144,985.5であり、約400ｍ東方の第191-4次調査（昭和63年度）で検出した平城宮造営当初の北面区画施設の心は、X＝-144,971.5付近に位置している。したがって、SD17740を雨落溝とした場合、築地は宮内の官衙を区画するものであった可能性が高い。また、溝を埋めたのは、整地層出土の軒瓦から奈良時代後半と考えられる。（小林謙一）

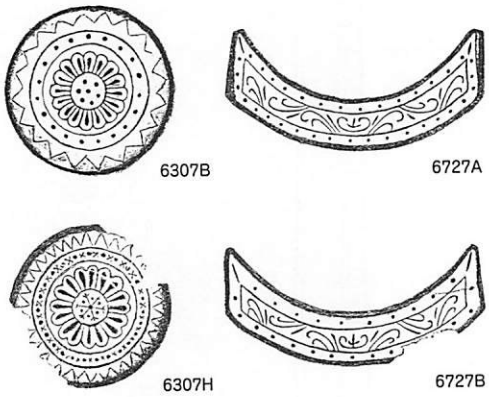

図43　第282-7次調査　出土軒瓦　1：8

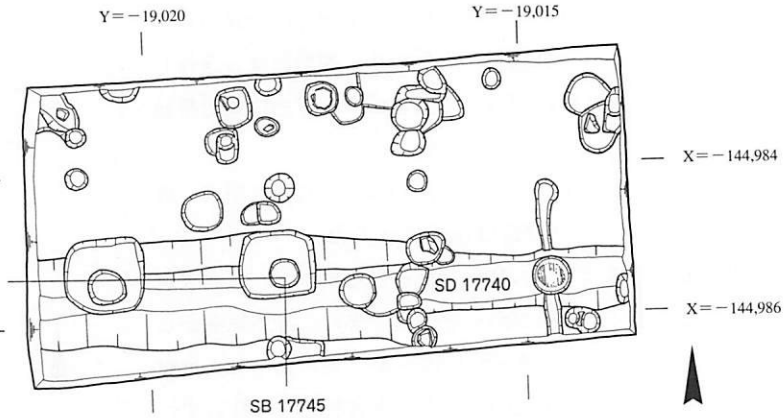

図44　第282-7次調査　遺構平面図　1：100